

動物福祉と群管理

日本獣医生命科学大学

田中 亜紀

今日のお話

- 動物福祉とは
- 群管理とは



動物福祉って何？

- 動物福祉 **X** 動物愛護
- 動物福祉 = 科学
- 動物福祉 = 「動物がいかに生きているか」
- 動物福祉 = 「生きていれば良い訳ではない」



動物福祉って何？

犬猫だけではない、
全ての飼育下の動物！！

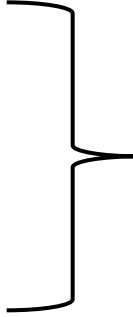
- The state of the Animals
= 動物の状態

つまり、「現在生きている(生活している)環境で動物がどのような状態にあるか(健康状態や動物の行動)」を客観的に評価する

- 健康、快適、栄養状態が良い、安全、本来の行動を示すことが可能、痛み、恐怖、苦痛等の不快な状態ではない
- 疾患予防、獣医療、適切な飼養環境、飼養管理、栄養、苦痛のない取扱、苦痛のないと殺、安楽死
- 身体的および精神的ニーズを満たすこと

Animal Welfare Assessment

動物福祉の評価

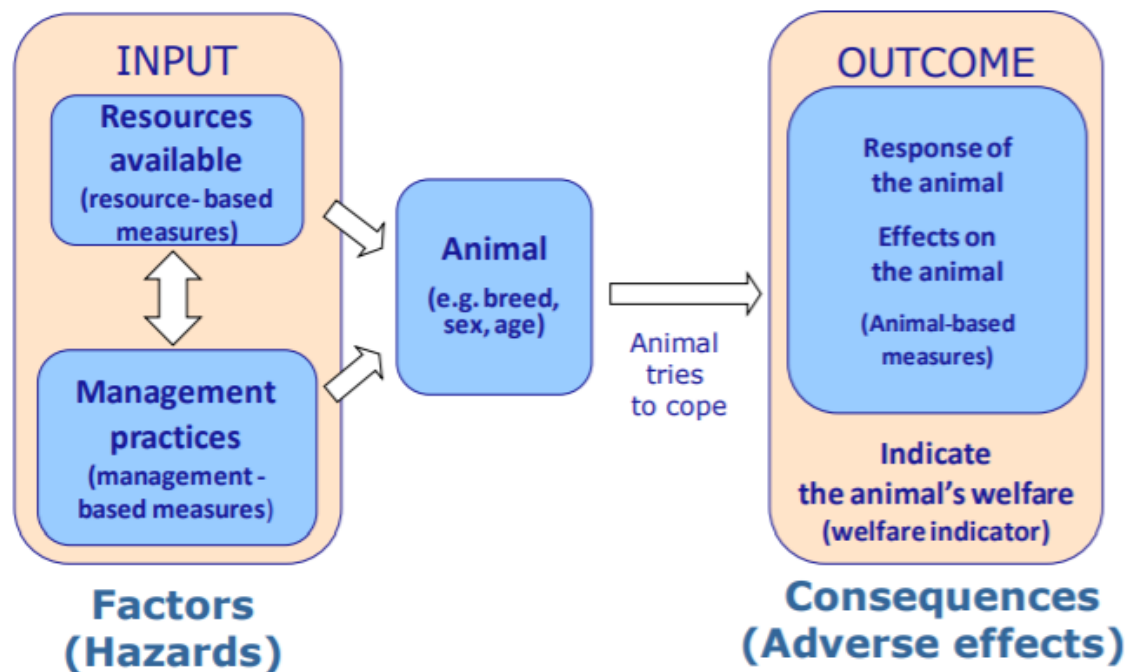
- Resource-based measures
飼養環境や食事などのリソース
 - Management-based measures
管理方法
 - Animal-based measures
動物の所見（疾患/外傷）や行動など
- 

→現場での動物（所見）の評価が重要

→Resource と Managementの結果が動物の所見＝動物福祉

動物の福祉の評価

- インプットとアウトプットで評価
- インプット \Rightarrow resource based + management based
- アウトプット \Rightarrow animal based



動物福祉の6つの自由

| | |
|------------------|---|
| 1. 飢えや渇きからの自由 | 完全な健康と活力を維持するための新鮮な水と食餌 |
| 2. 不快からの自由 | 休息場所を含む適切な収容環境 |
| 3. 痛み、傷害、疾患からの自由 | 予防と迅速な診断および治療 |
| 4. 正常な行動を発揮する自由 | 十分な空間、適切な施設、動物種に合った交流 |
| 5. 恐れや苦痛からの自由 | 精神的苦痛を避ける環境や処置 |
| 6. 安楽死の自由 | 不必要な苦痛、予後不良／治療困難な疾病管理および治療の一環、公衆衛生や安全確保 |

| | 福祉の基準 | 測定方法（例を一部抜粋） |
|----------|------------|-------------------|
| 適正な給餌 | 長期に渡る飢餓がない | BCS（ABM） |
| | | 給餌方法（MBM） |
| | 長期に渡る渴き | 給水方法（MBM） |
| 適正な収容環境 | 快適な休息 | 寝床（RBM） |
| | | 尖った先端（RBM） |
| | | 動物の清潔度（ABM） |
| | 快適な温度 | 震え/パンティング（ABM） |
| | | 温度や湿度（RBM） |
| | 動きやすさ | 空間（RBM） |
| 適正な健康 | 傷害がない | 皮膚の状態（ABM） |
| | | 跛行（ABM） |
| | 疾患がない | 痛みの兆候（ABM） |
| | | 下痢（ABM） |
| | | 発咳（ABM） |
| | | 鼻分泌物（ABM） |
| | | 呼吸困難（ABM） |
| | | 罹患率（MBM） |
| | | 死亡率（MBM） |
| | | 管理による痛みがない |
| 適正な行動 | 社会性行動の発現 | 社会性を考慮した飼養環境（RBM） |
| | | 社会性のある行動（ABM） |
| | その他の行動の発現 | 異常行動（ABM） |
| | | 発声の程度（ABM） |
| | | 運動（MBM） |
| | 人と動物の良好な関係 | 人に対する反応（ABM） |
| 前向きな情動状態 | 情動状態（ABM） | |

鹿にとっての福祉とは？

- 野生化の野生動物に福祉はない
- **飼育下の野生動物には福祉を担保**
- 鹿の身体的/精神的ニーズを満たす
 - ➔ 鹿の正常の行動を発揮できる環境とは？
 - ➔ 鹿に必要な管理方法とは？

鹿に必要なニーズ 【収容環境】

→頭数に見合った十分な空間（＝行動圏/縄張り）

➤（例）6-8頭/haで自由放牧（Red deer）

→過密になると、ストレスになる

→正常な行動を発揮できる環境

➤（例）水あび

→安全な休息場所

➤直射日光を避ける木陰

➤雨風を避ける場所

→群れ動物なので、完全隔離はストレス

➤他の鹿も見えるところで

鹿に必要なニーズ 【群管理】

- 鹿は群れ動物→個体管理ではなく群管理
 - 1個体の健康に執着するのではなく、群全体の健康に着目した管理方法
 - ところが、、、従来の獣医療は個体管理が主流で、群管理は産業動物の概念
 - 病気になって治療ではなく、病気にならない管理
 - 負傷動物は？
- ➡何をどこまで治療するかは、群全体の健康と管理状況、収容状況で総合的に判断

鹿に必要なニーズ 【群管理】

- 群としての目標値を設定
 - ➔ どこを目標に設定するのか？
 - ➔ 頭数を減らす？増やさないように維持？
 - ➔ 目的を明確にすることが重要
 - 何を何のために何を根拠にやっているか



- 乳生産を最大限にする
- 動物を快適な環境で飼育管理
- ズーノーシスの予防
- 感染症予防
- 汚水処理
- 乳中の薬剤汚染予防

鹿に必要なニーズ 【群管理】

- 健康管理
- 負傷動物の治療方法
- 群管理を基にしたEvidence-based medicineが基本

- 獣医療にも限界がある
- ➔福祉を担保するための治療の一環としての安楽死

群管理での治療

(個体への治療は群全体のために)

- 現状を的確に把握する
(今、群レベルで何が起きている)



- 問題点を客観的に抽出
(どこにどんな問題があるか)



- 介入処置
(科学的根拠に基づく改善処置)

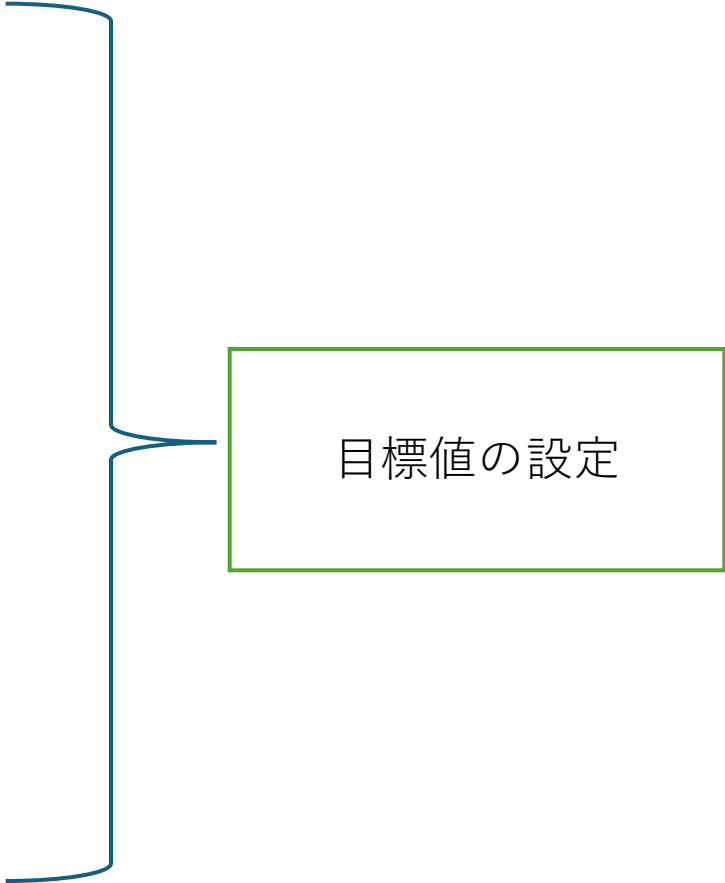


- 成果測定
(介入措置に効果はあったか?)



群管理

- 日々のデータの蓄積とモニター
- 群動態のモニター
 - 疾病率
 - 罹患率
 - 負傷率
- 疾病情報（例）
 - 治療期間
 - 治療対象
 - 治療目的
 - 治療の根拠



目標値の設定

動物福祉の評価

- 収容環境
- 管理方法
- 動物の状態

【生きていれば良い訳ではない...】

【いかに生きているか】

【鹿の種特異的な行動を発揮できているか...】

今後の課題

- 群としての目標値の設定
- 群の健康管理の手法
- 鹿苑の獣医療の在り方